

## “追い風”は吹くかー風力発電ツーリズム

新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、菅義偉首相は、ポストコロナの成長戦略として「デジタルとグリーン」を打ち出した。官民のデジタル化を進め、2050年までに脱炭素社会を実現するという。この脱炭素化の動きは、秋田県の観光振興策にも影響を与えそうだ。

脱炭素化に向けた再生可能エネルギーの導入拡大は秋田県でも進む。県沿岸部は国内有数の風力発電の適地といわれる。日本風力発電協会のまとめでは、2019年末の秋田県の陸上風力発電累積導入量は48万kWを超え、2年連続全国一。風車が建ち並ぶ海岸線の風景を目にして、驚く来県者は多い。

能代港と秋田港の港湾では国内初となる大規模洋上風力発電所の建設工事が進み、沖合の洋上風力発電も国が事業者を公募中だ。この動きを受け、県や沿岸市町村、飲食・宿泊業の関係者からは、陸上と洋上の風車を資源とした観光振興に期待する声が上がっている。

風車が並ぶ景色の受け止め方には個人差があり、風力発電に起因する環境問題や生活への影響などを懸念する県民もいる。一方、工場見学や工場夜景が観光資源になっている事例を考えると、風力発電ツーリズムも成立しそうだ。

風力発電ツーリズムに関しては、19年に能代市の中学生が興味深い提言をしている。再エネ電力で風車をライトアップしたり、船に乗って風車の景観を楽しんだりする観光プランだ。この案は、地元企業と中学生が共に地域活性化策を考える機会をつくることを狙って秋田魁新報社が開催した「秋田活性化中学生選手権」で発表された。生徒たちは、発電所の施工管理を手掛ける企業を見学し、アイデアを思い付いたという。

建設工事が進む港湾に風車が建つのは22年以降。風力発電ツーリズムが、コロナ禍で打撃を受けた観光産業を回復させる“追い風”になるだろうか。再エネが秋田の中学生の未来を照らす基幹産業に成長することも願いたい。

秋田魁新報社 営業部次長 木村環



風力発電の風車が並ぶ秋田市の海岸線＝2019年5月